

2023 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	「災間」の時代におけるよそ者とレジリエンス ー発災後に移住した女性たちの実践に着目してー
キーワード	①移住女性、②レジリエンス、③災間の時代

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	ヤマザキ マホ 山崎 真帆
配付時の所属先・職位等 (令和5年4月1日現在)	東北文化学園大学 現代社会学部 助教
現在の所属先・職位等	東北文化学園大学 現代社会学部 講師
プロフィール	専門は文化人類学的な視点・手法による災害復興過程の研究である。学部在籍時に東日本大震災が発生し、大学を休学、宮城県北東部の被災地域において支援活動に従事した経験を持つ。進学を機に「支援先」は「調査先」となり、特に「被災地」なのかそうではないのか、「被災者」なのかそうではないのか、どっちつかずの曖昧な立場に置かれた地域・人々と「復興」という概念・現象の関係に注目して調査を行ってきた。 近年は、発災後に被災自治体に移住した人々に焦点を当て、復興とその先の課題との接続についても調査・研究している。自身も2021年より仙台市（勤務地）と南三陸町（調査地）の二拠点生活を行う「半」移住者である。

1. 研究の概要

東日本大震災発生後、東北沿岸の津波被災地域では以前からの課題であった人口減少や高齢化が加速した。一方で若年層を中心に、支援活動の経験等をきっかけに被災地域へ移住する動きがみられ、現地のコミュニティは独特の様相を呈している。本研究では、こうした移住者のなかでも特に女性を対象とし、彼女ら、すなわち被災コミュニティにとっての「よそ者」と復興、まちづくり、そしてその渦中で発揮されるレジリエンスとの交わりの解明を目指した。具体的には宮城県本吉郡南三陸町をフィールドに、発災後の支援活動を経験した移住女性ら14名に各2時間程度のインタビューを行い、彼女たちが2023年に立ち上げた子育てグループ「南三陸子そだてハッピープロジェクト（通称「みなはぴ」）」が主催するイベントにおいて参与観察を行った。

2. 研究の動機、目的

(1) レジリエントな地域コミュニティを構想する手がかりを探る

近年の日本社会では災害の甚大化・頻発化・広域化に伴い、短い期間に同じ地域や人びとが繰り返し被災する事例が散見される。こうした状況下では、今日を「災後」ではなく「災間」の時代として捉えるべきであり、厄災が繰り返すなかでも持続可能であるようなしなやかさ＝レジリエンスを有する地域社会、コミュニティを構築することが重要であると考え。本研究は対象地域でのフィールドワークを通し、「災間」の時代においてレジリエントな地域コミュニティを構想するための手がかりを探ることを目的とした。

(2) 「よそ者」の視点からレジリエンスを捉える

① 「よそ者」としての女性への注目

災害による被害から回復しようとする力としてのレジリエンスは、近年の災害研究を支える重要な概念である。従来レジリエンスは元の状態への回復を指すものとして様々な分野で使用されてきたが、近年は「望ましくない状況を脱して別の安定状態に移行する能力」としても捉えられつつある。これまで、自治体や被災コミュニティを主体とするレジリエンスのあり方が議論されてきたが、一方でレジリエンス論が、主体とされる社会やコミュニティを被災者や被災地に限定したり、本質化・実体化したりするきらいがあるとの指摘もある。本研究もこうした指摘と関心を同じくし、コミュニティ内外の境界に立つあいまいな存在としての移住者（＝よそ者）、中でも復興過程の意思決定プロセスから排除される傾向のある女性の視点からレジリエンスを捉えることを目指した。

② 支援活動を経験した移住女性への注目

報告者が本研究と一部期間重複して取り組んだ南三陸町の移住者全般を対象とする研究において、支援活動を経験した移住者が、混乱期を共に乗り越えるなかで培われた地元住民からの信頼感に裏打ちされ、南三陸町内外の様々な人びとを媒介し、町の復興を推進したことが明らかになった。このことを踏まえ、本研究でも特に支援活動の経験を持つ女性に焦点を当てることとした。

3. 研究の結果

(1) 研究枠組みの再設定

本研究では、移住女性が地域コミュニティにおけるレジリエンスの構築・発現に貢献するという仮説をもって調査を行ってきた。しかしながらその過程で彼女らの大半は地域活動への参加に消極的であり、行政区や伝統的な地縁組織である講といった小単位の地域コミュニティへの帰属意識も希薄な傾向があることが明らかになった。この点に関しては今後さらなる調査、分析が必要である。一方で、以下の通り南三陸という「まち」単位での活動、復興に関しては今日に至るまで積極的なかわりがみられたため、研究の枠組みを再設定し、取り扱うレジリエンスの主体を地域コミュニティから南三陸町という自治体レベルへと拡張することとした。



図1. 移住女性へのインタビューの様子
（報告者撮影）

(2) 被災自治体における移住女性の実態

① 移住女性概観

まず、同町における移住女性の実態を概観する。震災前の南三陸町では都市部等から移住するIターン者は限られており、婚入者が中心であった。一方、発災後は支援活動等をきっかけとしたIターン者が増加している。しかしながらIターン者の流動性は高く、彼らには「この町に居残るには、この町の人と結婚するしかない」「やっぱ残る人って結婚した人が結局多いよね」という感覚があるという。定量的な実態把握は未だ行われていないものの、実際、2024年現在も同町に継続的に居住する元ボランティアの女性には、①従前住民との結婚を機に町内に移住したケース（「結婚＝移住」の婚入女性）、②就業等をきっかけに移住したのち従前住民あるいは男性移住者との結婚を機に町内に定住しているケース（「移住→結婚」のIターン女性）が多いといえる。

② Iターン女性と婚入女性

後者のIターン女性らは「復興に携わりたい」「まちのために何かしたい」という思いを持ち移住し、その後も移住者・Uターン者・地元のリーダー層ら（しばしばIターン女性らの配偶者となる）が形成する人的ネットワークに包摂され、継続的に復興支援活動やまちづ

くり活動に従事してきた。しかしながら結婚・出産を機に「移住者感覚」や上記の復興・まちへの思いが低減する傾向がある。

一方前者の婚入女性については、「(復興に携わりたいという思いは) なかった」という声や「(復興に携われないことに) もやもやしていた」という声が聞かれるなど、結婚＝移住後は復興・まちづくりという局面において、後景化していたといえる。

(3) 子ども問題を核としたネットワーク化とレジリエンス

今日の南三陸町では、これまで見過ごされてきた「同町における子どもの産み育てにくさの改善」という共通の関心のもとに両者が合流し、ネットワークが結び直されている。移住女性は再びまちづくりの前線に立ち、まちに変革をもたらそうと奮闘している。具体的には、前述のみなはびを立ち上げ、従前住民からの批判的なリアクションに直面しながらも、町行政との交渉を重ね、「自分らで変えられるところを変える」ことを目指して積極的に活動している。

南三陸町では震災を機に若い世代の流出が進み、合計特殊出生率の低下に拍車がかかった。町内戸倉中学校の閉校（2014年3月）、県立南三陸高等学校の定員割れ常態化など少子化の加速とその影響が顕在化している。上述したような、「よそ者」だからその問題意識に立脚し「子どもを産み育てやすい」まちへと変えようとする移住女性らの実践は、災害により生じた「望ましくない状況を脱して別の安定状態に移行する能力」としてのレジリエンスを駆動し、南三陸町というまちの持続可能性を高める取り組みであると結論づけられる。

報告者は、今後こうした一連の成果を、レジリエンス概念の再検討を旨とする更なる調査研究へとつなげていく所存である。

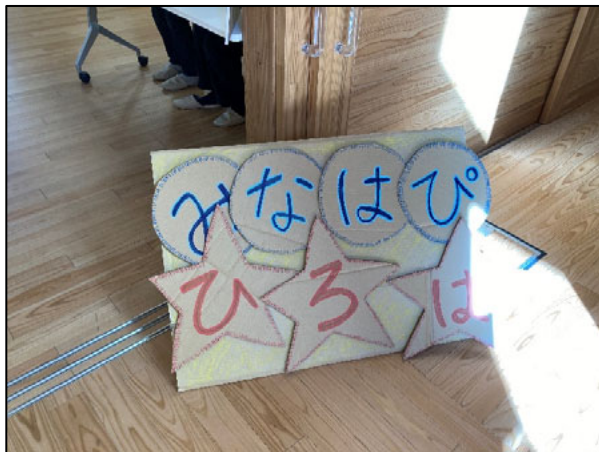


図2. 「みなはび」開催イベント看板
(報告者撮影)



図3. 「みなはび」開催イベントの様子
(報告者撮影)

4. 研究者としてのこれからの展望

私はこれまで、災害研究の対象、災害復興の当事者になりにくい曖昧な立場の地域・人々の視点から復興を捉え直してきました。この曖昧さの中にこそ、災害被害からの回復を促すしなやかな創造性を見出せるのではないかと考えたためです。学生時代は空間的な曖昧さに注目し、相対的に被害の軽微だった地域・人々に、近年は時間軸からみた曖昧さに注目し、被災後の移住者に注目しています。プロフィール欄に記載したとおり、私は元支援者であり、現在は南三陸町にも拠点を持つ「半」移住者です。曖昧な対象に注目する研究はそれ自体の位置づけも曖昧であり、寄る辺ない孤独を感じてきました。私自身の当事者性が私を鼓舞し、研究活動を支えてきたように思います。今後はこの当事者性を「強み」へと昇華し、平時の研究と非常時の研究をつなぐようなデータ、知見を蓄積していければと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、私の調査研究に対しまして、多大なるご支援を頂戴し誠にありがとうございました。先に記述しましたように、本研究は災害研究と平時の「よそ者」研究を接続しようとする

挑戦的かつ非常にあいまいなものであり（専門を問われると答えに窮します）、どのように第一歩を踏み出すべきか逡巡しておりました。そのような折、若手・女性研究者奨励金の公募要領にあった「分野の限定はしない」の文言に励まされ、応募を決意いたしました。光栄にも本研究を採択いただいたことで、膨大な蓄積からなる 2 つの研究領域に、頼りないながらも小さな橋を渡すことができたものと自負しております。災害が頻発する捉えどころのない時代においてこそ、こうした曖昧な領域の研究が貢献できるものと確信しております。今後も皆様の期待に沿えるよう、引き続き尽力してまいります所存です。